

戯曲

あまつ空なる…中村眞二郎

まろ
空なる

…中村眞一郎

戯曲あまつ空なる…

一九八七年十一月二日 初版印刷
一九八七年十一月十三日 初版発行

著 者 中村眞一郎

装丁者 芦澤泰偉

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

営業 〇三―四〇四―一二〇二

電話 編集 〇三―四〇四―八六一

振替口座(東京) 〇一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバー・帯に表示してあります

© 1987 Printed in Japan

ISBN4-309-00486-5

あまつ空なる…

登場人物（登場順）

式部卿宮（若い王族、快樂主義者、後、東宮）

中納言（同年輩の友人、終末論者、唐では黃門と呼ばれる）

衛門（式部卿宮の従者）

久光（中納言の従者）

若狹（大君の若い侍女、後、敬信^{きょうしん}尼）

大君（左大将の姫、後、尼姫君）

尚書右丞^{うじょう}（唐の帝の近臣）

黒人（侍従、エチオピア生れ、アレキサンドル）

宦官（偽の聾啞者）

元大使（母後の父）

女官（男装）

女官（金髪、西域女、ズレイカ）

皇子（子供）

母后（中年の初期）

母尼君（母後の母）

吉野姫

乳母

乳母の娘

素材 この戯曲は、平安朝後期の『浜松中納言物語』から発想し、その荒筋をもとにして、作者が自由に自分の思想的展開を試みたものである。

時代 平安時代、ほぼ十一世紀半ば、末法の世の近い頃。ただし衣裳などは必ずしも時代考証にこだわる必要なし。

ただ、ひたすら優美専一の舞台となるように。美男美女のエレガンスの、夢物語の雰囲気。

背景には必ず、季節感を出すこと。雪、桜、若葉、月、紅葉など、『古今集』の世界。

愛の場面の高まりには、同一の旋律の曲が鳴る。時には軽快に、時には深刻に。

プロローグ（幕前）

都大路。

侍女をつれた旅姿の若い女、登場。

あとから僧侶たち、列を作つて読経しながら現れ、舞台中央で立ちどまる。

先頭の僧「皆の衆、ごくろうですがもうひと息、声をあげて、都の人々の魂のために祈りましょう。この世の亡びる末法の世が、もうついそこまで迫っているのですから」

行列動き出す。

女と侍女、その行列のなかにまぎれ入る。

後に、まだ少年の面影を残した若い式部卿宮が、立ちどまって舌うちし、行列を見送る。

式部卿宮 忌いましい坊主共だ。まっ直ぐに地獄まで行つてしまえばいい。地獄まで――

街の人のあいだから、書物を小脇にした、宮と同年輩の中納言、立ち現れる。

中納言 式部卿宮、それは無理な願いですよ。あの者たちが経を誦えながらあの世へ行くとしたら、行先は極楽にきまっています。日頃の行いからすれば、あなたこそ終はつのすみかは地獄でしょう。あの世へ行つて、大嫌いなあの者たちと、もし地獄で一緒に暮すとなれば、閉口するのはあなたの方ですよ。

式部卿宮、中納言のからかいの言葉に、碌に耳も傾けず、伸び上つて僧の群の方をまだ眺めている。

中納言 それにしても宮は何で、み仏に仕える者どもをそう忌いまして、あので救われるのは厭だというのですか。

式部卿宮、急に中納言に気づいたように、

式部卿宮 私があの世へ行つてからどうなろうと、余計なお世話だ。そうではないか、中納言。それよりこの世での、私の邪魔をしてもらいたくないのだ。

中納言 (笑いながら) 僧たちが一体、宮の恋のどんな邪魔をしたというのですか。

式部卿宮 あいつらのお蔭であたら美女の姿を見失ってしまった。例の左大将の邸のまえあたりで、通りすがりにその市女笠のなかの美しい面影に惹きつけられ、ここまでつてきたのに。いきなり土塀の角から、あの坊主どもの行列が現れて、おかげで女の姿はどこかにまぎれてしまった。まことに怪しからん。

中納言 (また笑い声で) いいことをしましたな、あの僧たちは。宮がもうひとつ罪を重ねるのを救つたわけでしょう。

式部卿宮 ばかなことを。この世の美しいものを、できるかぎり賞^{あづか}でるのが、生きている

者のつとめだ。中納言のように、この明るい空のしたで、花々も喜びに微笑んでいるというのに、いつもこの世の終りのことばかり考えて、恐れおののいているなど、愚かなかぎりだよ。なぜ、小鳥の声やせせらぎの音に、生きる楽しさの響きを聞こうとしないのだ。なぜ、女の頬にうつるまつげの影に胸を顫わせないのだ……

中納言（短い沈黙のあとで）宮は本当に恐ろしくないのでですか。み仏のお力が人間に及ばない末法の世が、つい目の先に迫ってきているというのに。ああして僧たちが毎日、都大路を経を誦して行列して歩いているのに。やがてはこの世が亡び、女の美しさも、夕べの空にかかる虹のように、儚なく消えてしまうというのに。

式部卿宮 よく言った。中納言も判っているんじゃないか。虹のように美しいからこそ、消える前のひと時を、いつくしもうと言うわけだ。もしも生きた女の美しさが、寺の仏像のように凍りついたまま、いつまでも変らなかつたら、私はまつ先に逃げ出すね。木で作ったみ仏のお姿に恋いこがれるのはばか者だと、昔の歌よみも笑っているじゃないか。

中納言（合掌して、何やら口のなかで誦えたあとで）ひたすらみ仏のお力におすがりして、魂の救いを念じるには、残りの時間もありません。宮中でも毎日、徳の高い僧たち

を集めて、祈りの会を催しておられるのに……

式部卿宮 おすがりしたいのは、み仏ではなく、君の力だ、中納言。実は、そう思い続けていたのだが、いいところで会った。

式部卿宮、周りを見廻し、扇を払ってその蔭で中納言に囁きはじめる。

式部卿宮の従者、衛門、中納言の従者、久光に近づく。

衛門（久光の肩を敲く）わが御主人の宮は、また何かよからぬお企てをはじめる御様子だ。まだ少年のようなあの若さで、御主人のきりのない色好みにも困ったものさ。そのたびに走りまわらせられるのは、この衛門なんだから。

久光 いや、若い殿方は、色好みくらいの方がいい。うちの御主人の中納言さまは、明けても暮れても読経三昧。閑さえあれば、「久光、恐ろしくないのか、この世が闇になる時が、もうそこまで来ているというのに」だからな。

衛門 うちの宮さまは、『源氏物語』とやらいう古い作り物語のなかの、何とかの宮という人物を気どって、都じゅうの女の寝所に忍びこむのだと、威張っておられる。あき

たものさ。

久光　うちの中納言さまは、世間の評判では、その同じ物語にでてくる何とかの大將という人にそっくりの、憂うつ病にとりつかれておられるとか。

衛門　お互い、並外れた主人を持つと苦勞するな、久光よ。

久光　全くだ、衛門。すまじきものは宮仕えとは、よく言つたものさ。

中納言、突然、式部卿宮の扇を払う。

中納言　（大声で）大君を、あの左大將殿の姫君を。

式部卿宮　（扇で、中納言を制して）しつ、声が高い。あの姫君は、今は君の妹になったわけじゃないか。

中納言　しかし、姫の父君のあの左大將殿は……

式部卿宮　知っているよ、中納言。君は父上の亡くなられたあと間もなく、お母上があの権力者をお通わせなされていることに、我慢がならない思いをしていることぐらいは、宮中では誰ひとり知らぬ者はいない。

中納言 あの前左將殿は、以前から私に目をかけてくれ、引き立ててくれた。私も第二の父のようにしたつていた。それが私の母に対する野心からだつたとは。そうしてとうとうこの頃では、母までがあなたの方を、父と呼ぶようにと私に言いつける始末です。

式部卿官 しかし、そのおかげで君が権力の中心に近づけたと羨んでいる者たちが大勢いるよ。そうして私のような色好みの若者たちは、君がいつでも姫の部屋に近づけるようになったことの方を、大いに羨んでいるというわけだ。中納言、まさか、君はもう、あの姫の寝屋の几帳を潜り抜けたわけではなからうね。

中納言 何という怪しからぬことを。宮といえども、そのような不謹慎な想像は、（絶句する）

式部卿官 冗談ですよ。冗談。君がそういう人でないことは、宮中で知らぬ者はいない。「玉の杯、底なきがごとし」だと、蔭で笑っている者もいるくらいだ。桜かざして遊び暮すのを生き甲斐にしている我ら若き大宮人にとって、生きた花を賞することも知らずに、この世の終りばかり心配している中納言は、何とも風変りな男だという評判だぜ。

中納言、何か抗議しかけるが、それを押しとどめるようにして、

式部卿宮　その君の変人振りが、今回は私には大変、ありがたいことになる。君はあの父親風を吹かせている左大将殿に、痛い目を見せてやれるわけではないか。私のたくらみに乗りさえすれば。

中納言　あの方のことには私は、一切、かかわりたくないのです。

式部卿宮　まあ、そう言わずに、今の私の話に加わってみないか。君にとってもこれは、この上ないうっ憤ばらしになるうというものだ。

式部卿宮、また扇を払って、中納言と内緒話をしながら退場。

衛門　どうやらうちの宮さまは、どこぞの姫君でもさう御計画らしい。また忙しくなるぞ。では……

衛門、急いで退場。